

## アイスコーヒー

phenomenon

今の私がアイスコーヒーの香りひとつで発狂してしまいそうなほどの興奮、恍惚を覚え、ある強迫観念に駆られるようになったのは間違いなく彼女のせいである。

大人になった今でもなお、あの黒髪が頭をよぎる。今でも鮮明に思い出される可憐な彼女の姿はセーラー服のままで軽やかなほほ笑みを浮かべている。あの小悪魔的な笑みに私はいつまで振り回されるのだろう。

当時の女子高生の私たちは未熟ゆえに最強で、世界がどこまでも無限に続いていると、本気でそう思っていた。

いや、嘘だ。みんなそのころにはもう自分には限界があることに半分気が付いていて、でもそれらを見えないように、笑いとノリで覆い隠していた。そんなことないと分かっている。「私たちは最強だ」と言わずにはいられなかった。見た目も脳みそもほとんど「大人」みたいな形をして、大人の仕事や責任感などの要素を抜き取ったのが当時の私たちだった。なんでもできた。無敵だった。そしてみんな、この「無敵」が今、「女子高生」である期間しか続かないこととうすうす気づいていた。暗黙の了解で気

が付かないふりをした。

ある日の放課後、クーラーで涼しくなった教室で彼女、イリサワ リアは長い黒髪を靡かせながらペットボトルのアイスコーヒーを飲んでいた。閉め切った教室で、彼女の飲むアイスコーヒーの香りが優雅に漂っている。その香りが私の鼻腔をくすぐるたび、彼女の吐き出した空気を見つけることができたようにとても素敵な気分になることができた。私の頬がほんのり紅潮したことを自分でも感じ取った。鼓動がトクトクと高鳴った。ほんのり息がしづらくなる。ひざ下スカートのださいセーラー服に私の気持ちは染み込んだ。少し歪な形をしていた。

今思い返すと、高校生という多感な時期に女だけの空間に閉じ込められたら何も起らないほうが不自然であるように思われる。私たちは「女子“校”生”だった。

男がいない。私がこんなにも恋愛気質だったことをここで初めて自覚させられる。最悪だ。クラスでいちばんかわいい女の子は女子校でも当たり前のように他校に彼氏がいる。塾で知り合ったらしい。その女の子は実際めっちゃかわいいう上に性格もい

い。加えて誰にでも優しい。ふわふわしている。彼氏がいるのも当然である。それに対して私の周りは女ばかりである。塾も行っていないし行く気もない。誰かに注ぐはずだった愛情がただただ余っている。他の対象にそれを向けようとも試みたが、上手くいかない。花でも愛でようかと考えたこともあったが、過去に貰った花束の花すらまともに水やりをせず枯れていく過程を見届けたことを思い出して諦めた。ドグラ・マグラ的に枯れゆく過程を絵に描きとめようと思つて二枚くらい描いたが、自分が何をしているのか分からなくなつてやめた。愛情が余る。しかも醜いほうの。自分だけで処理するのは難しい。でも発散する宛てもない。こまつたこまつた。

そんな毎日を送っていたらだ。リアが私に自身の胸を押し当ててくるようになったのは。

いちばん最初は体育の授業のストレッチだった。ペアを組まされて柔軟をする。私が体育館の床に脚をピンと伸ばしてできる限り開いて座る。リアが後ろから私に体重をかける。妙に妖艶な香りがした。いつもははしやぎがちな彼女がこの時はやけに静かだった。いつものノリとは違うことを敏感に肌で感じ取る。何も口に出さないことが異質さを何よりも雄弁に語っていた。私の背中にリアの胸、みぞおち、

おなかが順番に密着していく。彼女の細くて豊かなカラダが私をゆると包み込む。肩のうしろからほんのりコーヒークが香る。リアが私の肩にコテンと頭を預ける。伏し目でどこか寂し気に、静かに甘える彼女をこの上なく愛おしく思ってしまう。理性のタガが外れてうっかり抱きしめ返してしまふようになるのを必死に抑える。相手はリアだ。ただの仲のいい友達。だのになぜこんなにも愛おしく思ってしまったのだろう。彼女の感じている寂しさが私の背中にジャージ越しに染み込む体温で伝わってくる。私は静かに身体を前に倒すほかできなかった。女同士でもこんなべつとりと密着することは滅多にない。みんな飢えていた。しょうがない。可哀そう。かわい。誰でもよかつたのかもしれない。でもリアは私を選んだ。私の心臓はしばらくぶりに楽し気に高鳴り、脳みそは妙な高揚感と背徳感を覚えた。

女同士はなんて都合がいい。女子同士であればいとも自然に手を繋いだり腕を組んだり抱きつき合ったりできるのだ。そこに不純な感情が内包されていたとして誰がそれに気が付くことができるだろうか。また、気が付かれたとしても誰がそれらしい証拠をはつきりと示すことができるだろうか。無論、不可能なのである。

「リア重いー」

そうとなれば私は何も気が付かないふりをして、そして心臓と脳みそを騙して、笑いとノリで繊細な本心を覆い隠してやり過ぎすほかなかった。おいしい感情だけしつかりと嘯みしめつつも、面倒なことには誤魔化しながら蓋をした。未来のことなんて考えていられたかった。

「アイカはもつといけるでしょー」

リアもすべてを覆い隠すように明るいつももの声を出し、思い切り体重をかけてくる。この空間を思い切り楽しんでるようにも思える。私とリアの密着する表面積が増す。境界がどんどんあやふやになる。溶けてひとつになってしまえばいいのに。加速するばかりの私の鼓動と欲望とが彼女にばれないことをただただ願う。後ろを振り向くと、少し動けば触れてしまいそうな距離に彼女の小悪魔の笑みがあった。一瞬私の時が止まる。こんな笑顔は男の前でやれ。宝の持ち腐れだ。ここが女子校でよかった。よかった？ 周りに男子がいたなら、彼女は私に向けてこんな表情をしていたらどうか。していない。私にスプーン一杯分の切なさがよぎった。

それからというものの、リアが時折私に“オンナ”を出してくるようになった。移動教室のときごく自然に腕を組んでくる、私の二の腕に柔らかく当たるあたたかいふくらみを感じる。彼女は故意的にやっ

ていることが、今までとは触れ方が異なっていることが私にはわかってしまう。私も女であるばかりに女のカンがはたらくのだ。そして最もよくないのが、私も満更ではないことだ。私の日常が分かりやすく色づいた。リアにもつと触ってほしい。こちらも彼女に触れられる機会をうかがうようになる。こんなごっこ遊び、早く辞めたほうがいい。

リアが私にこんなことをするのは、周りに男がないからだ。私は男の代わり。ただの代役。分かっているにもこんなにも嬉しかったのは、リアが私以外の女子にはくつついたりしなかったからだ。リアが日常的に腕を組んでくるのは、くつついて甘えてくるのは、彼女を満たしてあげられるのは私だけであった。リアの特別は私だけであった。これは自惚れじゃない、事実であったのだ。

私とリアとの間だけ、流れる空気が他の女友達とのそれとは違っていた。女子校という女の園で私たちの甘ったるさやほんのり漂うものさみしさは異質であったかもしれない。でも、互いに一線は引いていた。私もリアも恋愛対象は男性だった。リアの元カレの話聞いたことがある。私も中学までは男の人しか好きになったことはなかった。それでも二人は絶対に両想いである自信が互いにあった。

そんな日常が何か月か続けば当たり前のように噂

が立つ。ある日リアと私の共通の友達に言われた。

「アイカとリアって付き合ってるの？」

付き合っていない。ただ好き同士でいるだけだ。欲を満たし合っているだけだ。触れ合えればそれでよかった。付き合ってしまったら、関係をはっきりとさせてしまえばすべてが終わってしまうようなぼんやりとした恐ろしさを感じていた。闇の中に吸い込まれていくようだった。終焉に向かっていくのが目に見えていた。当時の私にとつて恐怖は幸せよりもはるかに大きな威力を持った感情だった。ぬるま湯につかっているのがいちばん心地よかった。

コーヒーは香りもいいが、実際に飲んでみると苦い。リアはなぜかいつも私よりほんのちよびつとだけ大人であるように思える。彼女とふたりでカフェに行ったことがあった。テスト期間の気分転換にこの日はカフェでの勉強会開催が決まったのだ。私たちはいつも四人グループだが、この日はたまたま私とリア以外の二人は予定が入ってしまったって不参加だった。リアはいつもと同じく砂糖もミルクもなしのアイスコーヒーで、私はアイスココアを頼んだ。私はまだブラックのコーヒーを飲んだことがない。私にはまだ苦すぎる。甘いほうがずっとおいしい。いつもブラックのコーヒーを飲むリアの気が知れない。

い。リアはどこかつかみどころがないように思うことが度々ある。いつも一緒にいるのにどこか遠い。

私には理解の及ばない領域がたくさんあることだけはわかる。彼女に本当の意味で触れることができない。ただ心地の良い香りを享受しているだけである。触れたら最後、どんな苦しいことが起こるのかが計り知れない。私はそれが途轍もなく恐ろしかった。

「アイカってコーヒー苦手？」

「そんなことないけど、なんで今さら」

「んー？ 苦手だったら申し訳ないかなって。いつも私が隣で飲んで。香るでしょ」

「好き。……だからこれからも、いいよ？」

私がリアの伏し目がちの瞳を覗き込む。私の中のオンナを呼び起こし、私史上いちばん可愛い上目遣いをリアに向けて仕込む。どちらが先に照れるかな。楽しい。リアは余裕そうな表情を浮かべているが、耳がほんのり赤く染まっていることにこの世界で私だけが気づく。かわいい、愛おしい。ずっとこの時間が続けばいいのに。

自分が何をしているのかが分からない。ふいにシラフになるときがある。その空間が幸せであればあるほど虚無感が大きくなる。私はいつも、ガランドウだ。

私たちが二人だけできるときの会話はいつも駆け

引きじみている。この関係が壊れないギリギリを攻める。思わせぶりもちよつとした寸劇も私たちは大好きだった。とにかく楽しかった。その時間は当時ほかのなによりも満たされていた。

夏の終わりのある日、リアは私の首の後ろをツツ―と指でなぞった。少しぞわぞわしてくすぐつたい。またいつもののがはじまった。私が笑いながら「なに―？」と振り向こうとしたとき、リアが氷柱のような声で言った。

「アイカの首って、綺麗だよね」

ゾクツとした。いつもは笑いながらすべてを誤魔化すのに、このときのリアの声はなにも隠せていなかった。隠す気がなかったのか、あまりの暑さにやられて隠すことを忘れたのか。真実は後者だった。一瞬後、リアはハッと我に返って慌てて取り繕おうとした。

「ガチでうらやましいんですけど〜！」

残暑が厳しい中で私の表面の空気だけが冷たかった。私とリアとはなんて脆くて儂い関係なのだろう。いつ壊れてしまうのかわからない。次この関係を壊しそうにしてしまうのは私かもしれない。もうなにもわからなくなる。怖い。こんなとき怖がる私を優しく抱きしめてくれる王子さまはこの世には存在しない。

結婚するなら王子さまみたいな人がいい。ちゃんと私の中身を見て、私という存在を愛してくれる人がいい。人間として、愛されたい。女としてじゃなくて、人間として。男の人の視線が気持ち悪い。最初から性的な目で見られて、私のことを人格ごと愛してくれるなんて到底思えない。どうせ私のことを抱きたいだけでしょ。私の肉体があれば、私がこれまで努力して培ってきた中身なんてどうでもいいんでしょ。でも生物って本来そういうものなのかな。性的に惹かれて、一緒になって、子孫繁栄。分かっただけでも、私が人間である以上、やっぱり中身で選ばれたい。性的な衝動じゃなくって、私自身を愛してほしい。本質的に愛されたい。

今日のリアのことが頭から離れない。彼女はあの時ひどく焦った表情をしていた。彼女もこの関係が終わることを恐れていた。じゃあ、もう一緒になるうよ。付き合おう。そう言えばリアも私も救われるのだろうか。いや、そんなことない。もつとつらくなる。私たちの関係はこの女子校という閉じた空間でしか成立しえなくて、大学に行ったらリアの周りに男の人が蔓延るようになったら私たちは終わる。敢えて女同士で慰め合う道理はない。将来、彼女のいちばん近くで連れ添っていくのは確実に私ではない。リアの未来を閉じてしまうなんて私には耐えられない。

い。はじまりがなければ終わりもない。私は彼女との恋を永遠にしたかった。私のわがままで。リアのことは冗談抜きに一生嫌いになる気がしない。恋愛の相手として、友達として、人間として。だからこそ、彼女を自分のものにしようとは思わない。きつと、一生離してあげられないから。リアが幸せをつかむ機会を奪ってしまうなんて、私にはできなかった。

私とリアはどこかの部屋にいた。床には毛足の長い触り心地のよいカーペットが敷かれ、柔らかなソファがセンス良く配置されている。私はこの場所を知らなかった。でもどこか懐かしさを感じた。その空間はオレンジ色の幸せと、ほんのりとふんわりとコーヒーの香りがあった。私と彼女との二つ以外でこの世界で動いているものは無かった。太陽も地球も止まるものだから陽は地面の少し上の沈む直前で留まり続け、時間も止まったように思える。どこか一点に吸い込まれ、空間が戻れなくなってしまう。ずっと心地の良い夕暮れの優しい暖かさがあり、それは永遠を感じさせた。たとえここで私はやさしい眠りについてまた目覚めても、どこまでもこのオレンジ色は続いているように思えた。リアはコーヒーを口に含み、深くゆつたりと呼吸をした。

ソファにもたれかかる彼女は夢のように美しく、妖艶に見えた。リアの長い髪が彼女の薄い肩とソファを伝い、美しく広がる。私はゆるりと立ち上がり、リアのすぐ横に腰をおろす。彼女のあたたかさを私の左側で感じる。ゆつたりと息をする。リアの胸が呼吸と合わせて上下するのを眺める。彼女がまどろむ。私の隣でとろとろと美しくやさしい眠りにつく。彼女のぼつたりとした唇がアダムとイヴの禁断の果実のように魅力的に見える。どうしてもそれがほしくてたまらなくなる。私は左腕を持ち上げ、中指の裏で彼女の唇に触れた。リアはゆつくりと目を開き、優雅にほほ笑んだ。そして私たちはふたたびやさしくてあたたかい眠りについた。

ぱちり。目が覚めると痺れた左腕と硬い机、椅子、いつもの感覚、少しこもった空気。眠っていたのは二十分程度だろうか。教室の騒がしさの度合いから今は休み時間であることが予想できる。頭の上に何か違和感を覚えつつもゆつくりと頭を持ち上げる。

「落ちる落ちる落ちる」  
私の頭の後ろから首を伝って落ちる寸前の私のペンケースを慌ててリアが受け止める。人は近くに寝ている人間がいるとその頭の上に何かを乗せたくなる習性をもつのだろうか。私のクラスでの定番だった。

た。眠たい目をこすりながら顔を上げると、やはりそこにはいつもの風景。目の前でカラカラと笑うリア。いつものリア。私のかわいいリア。誰のもでもないリア。彼女の天真爛漫さが今はほんのり傷にしみる。女友達の前では基本的に天真爛漫な屈託のない笑顔を浮かべる。そこには色っぽさや大人らしさはほとんど含まれていない。しかし彼女がオンナになると、途端に寂しさが薄っすら香る艶やかな笑みへと変わるのだ。それを享受できる男が全員うらやましい。たった一度でいいから、彼女から男扱いされたい。男の代わり、ではなくて、正式に男と接するように扱われてみたい。彼女のいつもより高くなった甘い声で笑顔を振りまかれない。「あの女、男の前でだけかわい子ぶりやがって」のときのかわい子ぶられる男になりたい。彼女から精一杯の「かわいい」を享受できるポテンシャルを持つ男になりたい。男ってだけで彼女の中の最大限のかわいいを向けられることができるのだ。男ってだけで。女の私がどれだけ努力を重ねても得られないものだ。目の前のリアはやっぱりかわいい。女友達に向ける自然な笑顔。少女のリア。夢で私が唇に触れたことを彼女は知らない。まだ子どものようなあどけない表情を浮かべる彼女に罪悪感が残る。それと同時に、現実であの唇に触れることができたらどんなに幸せだろう。

とも思ってしまう。かわいいリア。彼女を見つめる私の瞳にはどうしても愛おしさと熱がこもってしまう。

男よりも女の私のほうが彼女のことをよく理解してあげられる。私、リアの生理が重くていつも苦しんでること知ってるよ。いつも保健室まで連れて行ってあげてるのは私でしょ。リアがつらいのわかってるからゆっくり歩くよ。階段も一段ずつ丁寧に降りる。途中で止まっちゃってもしやがみこんでもいつまでも待つし背中もさするよ。なにもわからないでなんとなくでやってるんじゃない。ちゃんとリアのこと理解してやってるよ。男じゃ、こんなことできないでしょ？ わかったふりして背中さすってくれてもそんなのにせものだよ。だってわかるわけないでしょ。女特有の苦しみなんて。こんなにかわいくてかわい織細なリアのことを、むさぐるしてきた男なんかにわかるわけがないんだよ。わたし、リアには幸せになってもらいたい。そこにせものなんていらぬ。

でもあの子を将来いちばん幸せにするのは私でないことくらい最初から分かっていた。だから私は、せめて彼女の安心できる場所でありたかった。いつでもどんなときでもいつまでも近い位置で関わっていたかった。彼氏の愚痴を聞いたり、結婚の相談を

されたり、そのほかにも恋人の前じゃ恥ずかしくてできないようなことも私の前ではしてほしい。ずっとずっとおばあちゃんになっても近い位置に居続けるの。高校を卒業しても、年に何回か、ゴールデンウィークとか夏休みとか長めの休みもときは必ず一回は会って、でもそれは遊びに行くとかじゃなくいい。ファミレスとかカフェとかを二、三件ハシゴしてダラダラ一日中おしゃべりしていたい。彼女の時間を私で独占する一日であってほしい。そしてたまにはどっちかの家に行って（大学生になったら一人暮らしとかするのかな）ゆっくり映画を見たりしたい。たぶんこのとき、ふたりならかなり距離が近くなると思う。キスはしない。でも膝枕はするくらいこの距離感。常にからだのどこかの面はくつついていると思う。私にとつての幸せってこれだと確信する。いつまでも、いつまでも、ちようどいい距離感で居続けられたらそれがいちばんの幸せなんだと思う。

九月の下旬に文化祭があった。もう秋に差し掛かる頃なのに、やけに蒸し暑い日だったことを覚えている。私たちのクラスの出し物は想像以上の成功を修め、なにかの賞ももらっていた。詳しくは把握していないしそんなことはどうでもいい。とはいえ、

私たちのクラスの気合いの入れようはすさまじいものであったし、一週間前から毎日放課後に最終下校時間ギリギリまで残って作業していた。賞などはどうでもよかったが、文化祭が無事終わると大きな達成感と少しの寂しさを感じた。ここまではいい。私の人生の中でも深く刻まれるであろう出来事があったのはその後だ。文化祭を片付けは当日の放課後すぐに行われた。斜陽のやさしい眩しさが、疲労困憊している私たちを包み込むようにして励ましている。今にも横になって眠ってしまいたくなる身体に鞭を打ち、残りの仕事をかたづけける。大量に使用した段ボールをスズランテープでくくり、資源ごみ置き場へ持っていく。このときも当然のようにリアと一緒にだった。そしてふたりきりでもあった。かよわい女の子がこんなにたくさんの段ボールを運ぶなんて。文句を垂れながらもおとなしく資源ごみ置き場へふたりで歩いていく。やつと着いたそこは幅が二メートルもないほどの狭さで床がコンクリートであり薄暗かった。ただ奥行きだけが教室一つ分用ほどある細長い空間だった。用がなければ誰も来ないような場所だ。まともに電気もなく、ただ一筋の夕日がやわらかくさしているだけだった。ほんのりとオレンジ色をしていた。私たちはへとへとでとりあえず座りたかった。奥のほうに投げたある段ボールの山に

適当に腰をおろす。こんなときでも私とリアは距離が近かった。いや、こんなときだからか。こんなにも至近距離になるとやはりほんのりとコーヒーを感じる。そういえば今日も三時ごろに自販機でアイスコーヒー買ってたな。しかも六五〇ミリリットルのいつもより少し大きめのやつ。疲れていると変に余計な事を考えだす。簡単に目先のことしか考えられなくなる。リアって結構まつげ長いよな、とか、形のいい唇してるな、とか、今キスしたらちよつとコーヒーの味するのかな、とか。ぼーつとする。最終下校時間が近づき、もうここには誰も来ないように思われた。今この世界には私とリアとのふたりがあるだけだった。熱く蒸されたこの狭い空間で今までの疲労も相まって私たちは正気を失っていた。互いに汗ばみ、息が少しづつ上がっていく。どちらかともなく手を重ねた。リアはかわいい。彼女のとろんと据わった瞳は私の唇に釘付けになり、白い肌が分かりやすく紅潮している。愛おしい。リアのこめかみを綺麗な汗が伝う。私は目を細めながら彼女の顔に手を添えた。リアも目を閉じる。私のリア。

機会が泥棒を作る。それは砂糖を煮詰めたようにトロリと甘く、後味にはほろ苦いコーヒーを感じた。私とリアとの間には有限の未来が広がってしまった。ひと時の誘惑が、フェロモンが、錯乱が、ふた

りの永遠を永久に連れ去ってしまった。ここには私と、彼女と、ひどく苦いアイスコーヒーの香りがあるだけだった。

川端康成は「別れる男に、花の名を一つは教えておきなさい。花は毎年必ず咲きます」という一節を残したが、私のはもつと酷い。毎朝コーヒーが香るたび、あの天真爛漫な笑顔が、哀愁漂う笑みが、あの瞬間と後悔とも言えるか分からぬなんとも形容しがたいもどかしい想いが浮かんでくるのだから。こんななんとも言えぬ気持ちを出すことを毎日儀式のように律儀にこなしているあたり、私は彼女への想いを当分引きずって生きていくのだろう。